

# 近代日中知識人の異なる琉球問題認識

— 王韜とその日本の友人を中心に —

薄 培 林

## Different perceptions by modern Japanese and Chinese intellectuals concerning the Ryukyu issue:

Wang Tao and his colleagues in Meiji Japan

BO Peilin

In the late nineteenth century, the international order in East Asia was undergoing a transition from tradition to modernity. Relations among the nations in the region were being radically transformed. In the 1870s, confrontation between the Japanese and Chinese governments regarding sovereignty over the Ryukyu Islands was aggravated. In the midst of these difficulties, the late-Qing intellectual Wang Tao (王韜) was invited by Japanese scholars of Chinese literature and culture to Japan, where he made the acquaintance of many Japanese intellectuals of the period. Wang Tao's visit took place immediately after the Meiji government had carried out the "Ryukyu *shobun*" (policies that eventuated in the annexation of the Ryukyus by Japan as Okinawa Prefecture), a time when tensions between China and Japan had reached a new level. This paper focuses on the issue of the Ryukyus as a source of conflict between Japan and China in the 1870s and 1880s. It analyzes the related writings by Wang Tao and his Japanese acquaintances such as Nakamura Masanao (中村正直), Shigeno Yasutsugu (重野安繹), and Oka Senjin (岡千仞). It examines the question of how Japanese and Chinese intellectuals perceived the international status and identity of the Ryukyus in the rapidly changing East Asian international order, and how they associated the Ryukyu issue with Sino-Japanese relations at the present and the triangular relations of China, Japan and the Ryukyus in the future. At the same time, this paper will highlight the contradictions between the perceptions of

these intellectuals concerning the Ryukyu issue and their proposals to “Develop Asia” (興亜), and analyze the nature of the intellectual shift toward modernity manifested in the perceptions of international relations and global politics by the Chinese and Japanese intellectuals of this period.

## 一 はじめに

19世紀後半期は東アジアの国際関係が激変する時期であった。1870年代の中国は、周辺諸国との関係が伝統から近代へと変容しつつあるが、まだ朝貢・冊封を特徴とする華夷秩序下にあった。同時代の日本は積極的に海外拡張政策を展開し、明の時代から中国の朝貢国となった琉球王国を、「封藩」・「阻貢」・「廢琉置県」といった措置によって明治政府の支配下に治め、琉球に対する近代的な主権獲得を着実に進めていた。この時期の日本と中国は、政府間では琉球問題を巡って外交上の対立が絶えずに生じていたものの、民間では両国知識人の交流は、冷え込んだ日中関係にさほど影響されなかったようだ。1879年、日本で『普仏戦記』や『循環日報』などが広まったことにより名声を博した王韜（1828-1897）は、明治の漢学界に招かれて数か月ほど日本を遊歴した。その際、中村正直（1832-1891、号は敬宇）・重野安繹（1827-1910、号は成齋）・岡千仞（1833-1914、号は鹿門）らをはじめとする明治の漢学者、報道関係のジャーナリストなど日本の知識人と広く交流した。その友好交流を記録したのが王韜の『扶桑遊記』である<sup>1)</sup>。

王韜と交友した日本の知識人には興亜論者が数多くいた<sup>2)</sup>。上記の中村正直・重野安繹・岡千仞はみな「興亜」を唱え、積極的に興亜会の活動に参加した興亜論者である。彼らと王韜の間には時局に関する討論もあれば、文章や書簡などによる思想的な交流もあった。『扶桑遊記』には中村と重野の序文、岡の跋文が付けられていることから、王韜と彼らの友情の深さが窺える。しかし、王韜訪日の1879年はちょうど明治政府が「廢琉置県」を強行した直後であり、琉球問題を巡って日中の対立が激化した時期であった。その際、日本と中国の知識人はこの琉球問題、

1) 王暁秋『近代中日文化交流史』（北京：中華書局、1992）及び張海林『王韜評伝』（南京：南京大学出版社、1993）を参照。

2) それは、『普仏戦記』における普仏戦争後の欧州及び世界情勢の発展趨勢に関する分析が最終的に東北アジアの情勢まで敷衍しているため、このような王韜の観点が「興亜」論の立場に立つ明治の漢学者にとって興味深いものであったと考えられる。この点につき、易惠莉「日本漢学家岡千仞與王韜——兼論1860～1870年代中日知識界の交流」（『近代中国』第12輯、上海社会科学院出版社、2002）を参照。

そして当時及び将来の中琉日関係をどのように考えていたのであろうか。

王韜と近代日本の知識人との交流やその思想の比較についてはすでに数多くの研究がある<sup>3)</sup>。その研究成果を踏まえて本論では、近代初期日中両国が対立する原点の一つとなった琉球問題に焦点をあて、王韜・中村・重野・岡らの琉球に関する論述や彼らの世界情勢認識を示す「興亜」論を分析することを通して、伝統から近代へと移行する東アジアの国際秩序の激変の中で日中の知識人たちが琉球の国際的地位やアイデンティティをどのように認識していたか、という問題について検討する。さらにこれによって、この時期の日中の知識人が、国際関係認識や世界認識において如何なる近代的な思想転換を行ったか、また東アジアの国際関係構築においてどのような異なった思考を示したか、といった問題を考え直してみたい。

## 二 日中文化交流の美談

王韜は1867年冬から1868年春にかけてイギリス・フランスなどを遊歴し、1871年に『普仏戦記』14巻を著した。『普仏戦記』は当時の知識人たちに世界認識の最新知識を提供し、刊行後まもなく日本にも伝わったため、王韜は日本で一躍有名になっていた。その一方で、中国の開明的な知識人にとって日本の明治維新は大きな刺激であり、王韜は香港にいるときからつとに日本の動きに注目し、日本の漢学や漢籍に深く興味を持ち、維新後の日本への実地調査を切実に希望していた。

『報知新聞』主筆の粟本鋤雲は最初に王韜の『普仏戦記』を発見し、この書物を比類なき貴重な書籍だと考えた。1878年、粟本は亀谷省軒・佐田白茅らの学者に王韜を日本へ招聘するように提案し、ただちに重野安繹・岡千仞らの賛同を得た。1879年春、中国に遊歴したことがあり、王韜と親しい関係にあった書籍収集家の寺田望南(1849-1929)が招聘状を送り、王韜は欣然として訪日の招きに応じ、1879年4月23日から四か月近く日本を遊歴した。その間、王韜の博学に傾倒し、競って王韜と交流した明治の文人の数は百名にも達している。この訪日によって王韜は近代日中文化交流の先駆となった。そこで本論では王韜と重野安繹・中村正直・岡千仞ら三人との付き合いを中心に検討してみたい。

重野安繹は無論『普仏戦記』を読んでいた。そこに現れた歴史叙述と表現手法の斬新さに重野は深く興味を持ち、王韜の文才を高く評価している<sup>4)</sup>。王韜に訪日の意があると知った重野は

3) 前掲の易惠莉の論文のほかに、徐興慶「王韜與日本維新人物之思想比較」(『臺大文史哲學報』第64期、台湾大学、2006)などがあげられる。

4) 重野安繹「扶桑游記序」、『成齋文二集』(東京：松雲堂書店、1911)、18頁。「余嘗觀先生所著書，羨其文

友人の中村正直に、王韜の訪日が実現すれば漢学界の幸いだとまで言い<sup>5)</sup>、来日した王韜を自宅に一月あまり滞在させ、その間、よく起床後に王韜と筆談をした。重野の『成齋文初集』と『成齋文二集』には王韜の評が数多く付いていることから、学術上における二人の交流ぶりが窺える。魏源の『海国図志』について、重野は魏源の「憂国の心が深い」と評価するが、海外情勢に関しては魏の観察が十分ではなく、王韜の世界認識のほうが遙かに魏の上にあると直言している<sup>6)</sup>。王韜への尊敬の意から、重野は老弱の体を顧みず友人らを連れて王韜の日本遊覧に付き添い、『扶桑遊記』が刊行された後にはその序文を執筆した。

『自助論』と『自由之理』の翻訳で有名な中村正直は、中国沿岸の各都市で最も有名な日本人学者とされている。重野宅で『普仏戦記』を見て多大な感銘を受けたことから、王韜の訪日計画に参加した中村は、『普仏戦記』を大いに称賛し王韜を深く尊敬した。一方の王韜も中村を東西の学術に精通した大家として評価し、二人の唱和した詩を『扶桑遊記』に数多く記している<sup>7)</sup>。中村が書いた『扶桑遊記』の序文の冒頭には「人生朋友之際，声応気求，肝胆相照，千里來会，恨相見晩者，夫豈偶然哉。無非由於我有誠以感，彼有誠以応，纏綿牽合，交孚凝聚，而遂成一大盛事也」<sup>8)</sup>と述べ、二人の意気投合ぶりを語っている。

明治初期に『米利堅志』と『法蘭西志』を編訳した岡千仞は、黄遵憲をはじめとする駐日・訪日清国知識人と密接に交流し、「西学東漸」の世界潮流に対して王韜と同様の興味を示している。岡は王韜を魏源と比肩させ、『扶桑遊記』のために書いた跋文において「『普仏戦記』がわが国に伝わって、それを讀んだ者は初めて王紫詮先生（紫詮は王韜の字一筆者）の存在を知った。王先生は卓識偉論で一世の風靡を鼓舞し、実にこの世の偉人である」<sup>9)</sup>と言い、まさに日本における王韜の最大の賛美者であった。岡はアジア情勢について王韜と議論し、さらにロシア地誌の中国語翻訳を王韜に建言した。また王韜に付き従って日本各地を遊覧し、名士として日本遊歴した中国の第一人者だと王韜を絶賛している。實藤惠秀の統計によると、『扶桑遊記』には岡の登場回数が28回にも達するとのことで、そこに記された二人の面会の詳細はどれもが岡の王韜への傾倒ぶりを語っている。東京滞在中、王韜は岡が在任する東京書籍館を見学し、自

藻，愛慕其襟度通儻，不規規乎繩墨」

5) 中村正直「扶桑遊記序」、『敬字文集』（東京：吉川弘文館、1903）巻7、15-16頁。「有東遊之意，果然，則吾儕之幸也」。

6) 王韜『扶桑遊記』5月21日之條、巻上、19-21頁。「默深（魏源一筆者）未足以比先生（王韜一筆者）」

7) 『扶桑遊記』巻中、3-4頁。「騷壇擅盛名」、「獨以儒學頭，文章個儻稱一時」、「兼明東西學術」。

8) 前掲中村正直「扶桑遊記序」、15頁。句読点は筆者。

9) 『扶桑遊記』の「岡千仞跋」。「普法戦記伝于我邦，讀之者始知有王紫詮先生，以卓識偉論，鼓舞一世風痺，実為當世偉人矣」

分の著述70数冊を寄贈した。その返礼として岡は書籍館を代表して『大日本史』103冊を王韜に贈った<sup>10)</sup>。ロシアをアジアの大敵とみなし、日清両国が連携してロシアに抵抗すべしと唱えた岡は、イギリスと連携してロシアに抵抗しようという考えをすでに持っていた王韜と因らずも一致したのである。ちなみに1883年から1884年に岡は中国に一年遊歴し、李鴻章・張之洞らの高官や各地の名士文人と面会した。その遊歴を記した『観光紀游』(10巻)には、岡が王韜に会うためにまず上海を訪れ、上海で王韜や張煥倫をはじめとする名士と密接に付き合っていたことが記載されている。

重野・中村・岡らの明治の学者が王韜を尊敬するのは無論彼らの洋学への強い関心によるものと考えられる。そして、彼らの王韜への傾倒ぶりは、明治維新以降でも日本の学界が依然として中国人の著作を通して西洋世界を認識しようとしていたことを物語っている。王韜は彼らの文章を評する際、重野・岡の人格や学識を高く評価し、二人のことを日本における「知己」と言い、二人との友情の深さを述べている<sup>11)</sup>。

王韜の訪日は始終友好的な雰囲気に含まれていたが、当時の日中関係や東アジアないし世界情勢の激変といった時事問題に関する『扶桑遊記』の記載は僅少で、ただ5月21日の記録において、時局に関する話題が僅かに登場しただけである。これは、知識人の交流と当時琉球問題などで日清間に起きた政治的な対立とが無関係だとは言いがたく、むしろ時事の話題を避けたというところから時局問題における日中知識人の意見の齟齬が仄かに窺えるのである。

### 三 「沖縄志序」にみる異なった琉球認識

王韜の訪日はちょうど日本と中国の間で琉球問題による外交上の摩擦が絶えない時期だった。周知のように、琉球は明の時代から朝貢国として中国との往來を進めてきたが、1609年の薩摩藩の侵攻以後は、直接ではないが薩摩藩の支配下に置かれていた。このように1870年代の「琉球処分」までの琉球は日本と中国の「狭間」にあって二つの大国に仕えながらどちらにも包摂されない特異な地位を維持していた。しかし、清朝政府はこのような琉球の「二重」の実態を

10) 中田吉信「岡千仞と王韜」(『参考書誌研究』13号、国立国会図書館、1976)、9頁。

11) 岡千仞『藏名山房文初集』(1920年版、関西大学図書館蔵)巻4、「答松林伯鴻書」の文末に附した王韜の評論。「鹿門慷慨激昂，中有血性。成齋秉純粹婉篤之性，而具芬芳排惻之懷。才識學三長，竝推巨擘。此二人，余皆得與之深交，可無憾已。余平生知己絕少，(中略)乃不謂得知己於日東。此生平生意料所不及者也。特余老矣，何日重游得再相見，一念之，又不覺悲從中來也。」

正式には知らず、琉球をただ中国の周辺朝貢国の一つとしか見ていなかった<sup>12)</sup>。ところが、日本では明治維新にともなって明治政府が、1872年に琉球藩を設置し、琉球国王尚泰を琉球藩王にした。1873年には琉球藩の管轄権を外務省から国内事務を担当する内務省に移行し、1874年には台湾に漂着した琉球宮古島の漁民が原住民に殺害されたことを口実に台湾出兵を行い、琉球人は日本人であることを清政府側に示そうとした。こうして、二世紀半もの間懸案となっていた琉球の国際的地位・帰属といった問題が浮上してきたのである。翌1875年、明治政府は琉球に対して清との冊封・朝貢関係の廃止、ならびに明治年号の使用などを命令するが、琉球は清との朝貢関係を継続する意向を表明する。1876年に明治政府は琉球の司法警察権を接管する。清政府は琉球の朝貢禁止に抗議するなど、1877年に駐日公使何如璋を派遣して琉球の独立を保つように日本と交渉させるが、外交上の決着はつかなかった。1879年、明治政府は琉球藩を沖縄県に改め、琉球王国を併呑した。琉球に対する明治政府の一連の行為は、清朝にとってはまさに中国を中心とした伝統的体制への挑戦であった。

日中間のこの琉球問題は、王韜と日本の知識人たちとの付き合いにはあまり影響がなかったようだが、この時期日中双方の知識人が注目する共通の関心事であったに違いない。一連の文章を著して琉球問題に対する自分の見解を述べたのは王韜だけではなく、王韜の友人である中村正直・重野安繹・岡千仞の三人にも琉球問題に関する著述がある。この三人は皆「沖縄志序」と題する序文を記しており、その中で当時の中琉日関係や琉球の国際的地位、その位置づけに対する各自の認識をそれぞれ述べている。

『沖縄志』（1877年）は、伊地知貞馨（1826-1887）が著し、重野安繹が校閲したもので、実地の見聞に基づいて系統的に記述された日本最初の琉球地誌である。伊地知は元薩摩藩藩士で明治初期に琉球在番を務めた官僚で、1871年から1879年の「廢琉置県」まで琉球問題の専門家として何度も琉球に行き、日本による琉球処分 of 具体的操作と緊密に関わった人物の一人である。この伊地知も中村正直・重野安繹・岡千仞ら三人とは友人関係にあった。中村と岡は共に伊地知が江戸の昌平黌に留学して以来の知己で、『沖縄志』のために序文を一篇執筆した。同じく薩摩藩士の重野とは昌平黌時代からの最も親しい友人であった。日本史学界を創立し、日本史学界の元老とされる重野は、当時伊地知が奉職した修史館の一等編修官を務めていた。彼はこの『沖縄志』を校閲して「後序」（奥書）を書いた<sup>13)</sup>。中村も重野も明治日本を代表する学者であるため、1879年10月1日の上海の『申報』では、中村と重野の序をそれぞれ「録沖縄志前序」と

12) 費正清、劉広京編『劍橋中国晚清史』（下巻）（北京：中国社会科学院、1993）、107頁。

13) 原口虎雄「沖縄志解題」、『沖縄志』（熊本：青潮社、1982）、561-563頁。

「録沖繩志後序」と題して転載している。

中村の序は1877年8月に書かれ、明治政府の琉球政策に反対する立場を表明する内容である。琉球が独立した「小国」であるという前提で議論を展開し、「弱国」としての琉球の「処世の道」に同情する中村は、次のように論じている。国の大小は相対的なものだ、日本は琉球に比べれば大国、中国に比べれば小国となる。一つの国が自立自存したければ、「自ら驕れず、自ら恃まず」して、その行為は必ず国をまもる道（「保国之道」）に合わなくてはいけない。知恵がなくて国力が弱いのに傲慢で大きな謀りごとをする国は急ピッチに敗亡しないものはないのだ（「智小而謀大，志驕而氣傲，積薄而發驟，未有不速其敗亡者也」）、という。ここで中村は、日本は自ら「小国」として自分の立場をわきまえるように振る舞い、中国とその周辺国との間の朝聘や会盟などの事、即ちその朝貢関係に関与せず、自国の力を多く蓄えてから（「不與中國朝聘會盟之事，厚積薄發，培本而蓄力」）初めて自立存続できるのだと暗に明治政府に対して警告をした。この記述から、中琉の伝統的関係を破壊しようとする明治政府に反対し、政府の琉球政策に保留の態度を取りながら、間接的に明治政府の海外拡張政策を批判する中村の姿が垣間見られる。

1879年2月、中村は陸軍医官渡邊重綱の『琉球漫録』のために書いた題辞において、日本と琉球の間の従来の緩やかな従属関係を顧みただ後、1872年以来明治政府による「封藩」から「廢琉置県」までの一連の「琉球処分」政策を次のように批判している。

聖朝為政尚忠厚，任民自主不相妨。譬如牛馬放郊野，不加衡軛不施繩。内地尚然況藩國，王道蕩蕩德洋洋。（中略）宜乎遠方慕其德，如子婦父客歸鄉。政教風俗不敢問，帝力何有恰如忘。嗚呼，懷遠唯在德，人情安舊固其常。包容羈縻而已矣，聖恩併與皇酋長。（中略）撫遠不要事隄防，不用必賤及魯恭，宜如朱崖與夜郎。<sup>14)</sup>

要するに、琉球のような小国に対して、日本は孔子孟子の「王道」即ち徳治主義に従って周辺国と平和的に付き合い、弱い国を助けてそれを包容・羈縻するべきで、その領土を貪ってはいけない、というのが中村の考えである。ここでは、漢の時代に辺鄙な地にある「朱崖」と「夜郎」という二つの小国に対する中国の懐柔・羈縻するやり方を例にして日本と琉球の関係を類比し、「徳」をもって琉球をいたわることを唱えている。漢学者と洋学者を一身として、東西文明の調和に苦闘する中村がこの時期に持っていた日琉関係認識は、相変わらず孟子の王道や民

14) 中村正直「琉球漫録題辞」、渡邊重綱『琉球漫録』（東京：弘令社、1879年）所収。

本思想を中心とした華夷秩序的な色彩が濃厚で、「徳」と「仁」を強調して近代西洋のパワーポリティクスに反対するものであった。彼の国際平和主義的な主張は伝統の儒教道徳思想から生み出されている。征韓論や琉球併呑といった明治政府によるアジア隣国への侵略行為に反対する中村の姿勢は、その国際平和主義思想から由来したものと考えられる。

明治政府の琉球併呑に反対する中村の立場と違って、重野安繹は1877年9月に書いた「沖繩志序」において次のように論じている。

沖繩志何以作？志琉球也。何不曰琉球，而曰沖繩？從土人所稱也。土人何稱沖繩？沖繩，邦語也，本土之名也。琉球，漢字也，漢人之所名也。沖繩自通漢土，受其封爵，服其衣冠，髻簪髭鬚，盡仿漢裝。而獨其稱國名用邦語者，何也？語言文字，同我邦俗，故國土之名稱，舉皆邦語也。觀乎國土名稱之用邦語，而其為我種類，為我版図也。<sup>15)</sup>

「沖繩」という言葉は日本語だ、しかし「琉球」は漢語で、中国と往来してから漢人によって命名された名称だ。この書物を『琉球志』ではなく『沖繩志』と名づけたのは琉球本土の人々が自分の国土を「沖繩」と称しているからだ。国土の名称に日本語を使うという点から見ると、琉球人は日本人と同じ民族であり、琉球は日本の版図だ、という議論である。

重野は、種族・言語もしくは交流往来、どの面においても琉球は中国より日本との間の歴史的淵源がより深いと考えている。琉球は「漢人」（中国人）と同じ種族ではなく、「漢土」（中国）と交通する前も中国の属藩となる前も日本と同じ種族だった。その時の琉球国は「藩名が無かったものの」実際には日本の属藩だ、というふうに指摘している。また、「長い間民族間の親近性や、自民族の言語の由来などを全く考慮せずに、かえって異族の漢人と親しくする（而不問其種族同異，自以沖繩冒國名，而不察其語言所由，反欲與殊方異族之漢人昵比）」として中国と交通した琉球を批判している。更に重野は、琉球本土の人々がこの本（『沖繩志』）を読んだら、「内向帰本」即ち日本に回帰しようとする心が自然に湧き起こるはずだ、日本の「内地人」が読んだら、「同類をあわれみ、属藩をおもいやる心（恤同類字藩属之心）」が生じるに違いないと指摘した後、書名を「沖繩志」にしたのは琉球の本来の称呼に従っただけではなく、もっと重要なのはそれによって「内外人の心を繋ぐ（併以繋内外人之心）」こと、即ち日本人と琉球人の団結意識をうながすのだ。これこそ作者の「著撰の本音」だと、最後に強調している。

15) 重野安繹「沖繩志後序」、『成齋文初集』（東京：富山房、1897年）巻2、19頁。（句読点は筆者）

同じ薩摩藩の出身で、二人とも明治日本屈指の史学者であるためか、琉球のアイデンティティやその帰属について、重野と伊地知貞馨の二人は非常に近い考え方を持っており、いずれも歴史的に見ると琉球は薩摩藩の附属だという認識に基づいた観点である<sup>16)</sup>。外務省官僚としての伊地知は尤もだが、二人の琉球認識にはこのような民族主義的な、国権主義的な傾向があるのは免れないだろう。

重野は近代歴史学の実証主義から、琉球の言語・民族文化と日本の言語文化との関連性に基づいて琉球のアイデンティティを確立させて琉球の帰属を決めようとした。この重野の見方は言語ナショナリズムを匂わすものであり、変容しつつある東アジアの国際関係に対する近代的認知ではあるが、それと同時に明治政府の琉球併呑・日琉関係の近代的改編のために学術的な根拠を提供することにもなるのである。1896年、重野は『支那疆域沿革図附略説』と題する地図集を編集・出版した。その中には夏から清までの中国各時代の疆域図が描かれ、中国版図の変遷過程が示されている。そして各時代の状況についての解説も行っている。どの地図でも琉球諸島は「沖縄諸島」と表記され、しかも解説文には、同じく中国と藩属関係にあった朝鮮やベトナムについては言及しているが、中国と琉球の交通関係については全く触れていない。そこから、琉球の日本帰属という考えが重野の中でどれだけ強く根付いているかを窺うことができる。

このように言語・種族の視点から日琉関係を見直し、琉球の日本帰属を論証した重野であるが、中村正直はこの重野論（「沖縄志後序」）を、名称だけに就いて事を論じ琉球の帰属を決めつけるものとして「余韻がない」と批判した<sup>17)</sup>。実は、親友同士の二人は同じく興亜会の会員であり、ともに「亜細亜連帯」を唱えている。重野は1880年代において明確に「支那重視論」を提起し誠意を込めた「日清連衡」を主張していた。だが、現実の琉球問題になると、重野と中村という明治漢学界の二人の大家は全く異なった認識を示したのである。重野の「沖縄志後序」は『申報』に転載された後、中国側の知識人によって大いに反駁される<sup>18)</sup>。

岡千仞の「沖縄志序」も1877年8月の作で、琉球の地位について、岡の観点は琉球が日本に

16) もう一人の薩摩藩出身の史学者、伊地知季安著の『南聘紀考』は、607年から1832年までの琉球と薩摩の交渉史を記録し、琉球が薩摩の藩属であることを歴史的に証明しようとした書物であり、『沖縄志』に記された重要な引用書目の一つでもある。

17) 『成齋文初集』巻2、20頁。「比也正名乎？名一正、而疑似判焉、向背決焉？文唯就名論事、而著撰本旨、發摘無餘蘊」

18) 例えば、姚文棟が修史館編纂の沖縄歴史地理に関する最新の書籍や文章から抜粋して編訳した『琉球小志』や、王韜の「琉球向帰日本辨」など一連の文章が挙げられる。

帰属するという重野安繹の立場とほぼ一致するが、ただし岡の場合は、琉球はかつて清国の冊封を受け、現在「一島両属」の状態であるから、琉球の国際的地位は国際法的に認められ難く、西洋列強に奪われやすい。ゆえに琉球へのコントロールを強めて琉球に対する支配権を明らかに示すことこそアジア大局の安定に有利であると主張し、完全に現実的な国際関係の視点から明治政府による琉球処分の必要性と正当性を論証しようとしている。岡は次のように言う。

我邦西南傲有琉球，猶東北傲有蝦夷，皆所以藩蔽邊海。禦侮之方，不可不講也。（中略）俄羅斯之於樺太，疆域懸絕，風馬牛不相及者，彼幸我不限疆界，悍然掠奪。況琉球鄰清國，又嘗受其封冊。一島兩屬，名號不正，若使美利堅當時學俄羅斯所為，則其地不羽而飛也矣。聖朝有鑒於此，其新發大号，拜島主為藩王，置兵營，嚴守備，庶幾名分一定，備虞有方。可以絕狡焉之望也。（中略）以樺太覆轍為戒可也。<sup>19)</sup>

伊地知が『沖繩志』を著したことについて、岡は相変わらず国際政治の視点から評価を与えている。岡によると、伊地知の著述の意図は、日本の琉球領有権を強調することによって他国の琉球への野心を途絶させることにある、さらに同時に現地の民心を安定させ、琉球問題でロシアに蚕食された樺太のような失敗を繰り返すことがないようにできるという。この時期の岡は、「両属」の琉球と日中両国の関係は近代的意義上の「主権」関係ではなく、琉球の「名分」即ちその政治的地位を近代的に位置づけて琉球の帰属を明確にしなければ国際法的に認めてもらえない、日本は樺太を失ったように琉球も失ってしまう、ということを手前意識していたのである。ゆえに岡はこの「沖繩志序」において明治政府の琉球政策に賛成の態度を示したわけである。

岡千仞の中琉日関係認識は同時代の東アジア知識人の中でずば抜けていると言えよう。1871年の琉球漂流民遭難事件から1879年明治政府による「廢琉置県」前後までの清朝中国には、琉球「両属」の現実を受け止め、「廢琉置県」を明治維新の一環と見なす黄遵憲や、「万国公法」に基づいて琉球問題を処理すべしと主張し、「琉球自立（独立）」論を唱えた郭嵩燾といった官僚は存在してはいたが、琉球問題に関するジャーナリズムの論調はやはり伝統的な中琉関係を護持しようとする「琉球中国専属」論が主流であった。

19) 岡千仞「沖繩志序」、『藏名山房文初集』巻1。

#### 四 琉球の国際的地位に関する王韜の認識

王韜も琉球問題に深く関心を寄せている。1879年、明治政府の「廢琉置県」が強行された後、王韜は『循環日報』において、「論日本経営琉球」（日本の琉球経営を論ず）と「論中東商辦琉球事」（中国と日本が琉球の件を相談するのを論ず）の二文を発表して「琉球処分」を行った日本のほうが義理に反していると強く批判し、「辨琉球屬於我朝」（琉球の我が朝に属すのを弁ず）と題する論説などを通して中国の琉球への宗主権を厳正に主張する。また「論琉球欲図恢復」（琉球が回復をはかろうと欲すのを論ず）といった論説を執筆して琉球の救国運動を支持しようとしている。さらに、「琉球朝貢考」、「琉球向帰日本辨」、「駁日人言取琉球有十証」、「琉事不足辨」などの一連の論説を著し、琉球を併呑した日本の侵略行為に反対する態度を表明している。

王韜はまず歴史的な考証から始め、琉球が中国に臣服したのが先で、日本に仕えたのは後だという事実を強調し、日本は琉球を併呑して独占してはいけないと非難する。特に、1871年に台湾に漂着した琉球宮古島の漁民が台湾「生番」に殺されたことを理由に台湾出兵を行った日本の行動は琉球を大切にするためではなく、その真意は「剪滅琉球」即ち琉球を滅ぼすことにあるのだと指摘している<sup>20)</sup>。

「琉球向帰日本辨」と題する文においても、王韜は日中双方の史書に依拠して、時間的には中国が日本より先に琉球と交通していたことを考証した後、8か条の理由を挙げながら琉球は日本の「内属諸侯」ではなくて一つの「自主の国」である、日本との関係はただ絶えずに朝貢往来しているだけだと論証している。1874年、台湾出兵の事態収拾のために日清の間で「中日互換條款」（「北京專約」）が調印されたが、明治政府側はこの条約の文面から、琉球人は日本国属民であるということが清政府によって認められたと認識し、この条約が琉球の日本帰属を確定する法理根拠だというふうに一方的に解釈している。この日本側の論調に対して、王韜はこう批判している。

至討罪台湾，尤昧於理，其始托言劫掠小田県民，繼乃及琉球漂民，我朝大度包容，勉徇英國公使之請而成和議。其所定條款兩端，未嘗一字及琉球；載在盟府，人所共見。乃遂欲以此指琉球為日本屬地，掩耳盜鈴。<sup>21)</sup>

20) 王韜「琉球朝貢考」、『穀園文錄外編』（北京：中華書局、1959）、147頁。王は次のように日本による台湾出兵について評している。「（琉球）國民船遭風颶泊，我朝本當加以撫恤，何容日本為之置詞。（中略）琉球之為我藩屬，日本非不知之，乃必以此為辭，其志在剪滅琉球可知矣，豈真愛惜琉球也哉？」

21) 王韜「琉球向帰日本辨」、150頁。

ここで王韜は、「中日互換條款」の条文には琉球に関する内容が一字もなく、琉球の帰属問題と全く無関係である、これは誰もが知っている事実だ。故にこの条約の文面をもって「琉球が日本に帰属する」と解釈するのは全くの事実歪曲で自己欺瞞である。要するに、この条約が琉球帰属を確定する法理根拠となることはないと言っている。王韜は考えていたのである。その後、琉球のような小国に対して、中日両国は協同してその「自立」即ち独立を守るべしと言ひ、自国の国益のために琉球を併呑した日本の行動を義に反する詐欺行為だと強く非難した<sup>22)</sup>。

王韜は日本と中国の琉球王国に対する異なった態度を比較して、琉球処分を強行した日本に非があるとして、琉球の「自立」(独立)を保ち、これまでの中琉日関係の継続を望んでいる。近代西洋の国際政治について、王韜はその弱肉強食性を指摘しながら、「万国公法」が存在するもののそれは実際の役に立たない空文に過ぎないと批判する。そして日本の琉球併呑については、西洋諸国は道理によって公正的に論じることなく、反って日本を庇って付和雷同してばかりだとして、西洋諸国の琉球問題に対する態度に憤慨の意を示している。言語・種族・政体制度のどの点においても琉球と日本の同一性が証明できる、という日本側の見方について、王韜は一々反駁していないが、ただ明治政府に「琉球藩」にされるまでの琉球は疑いもなく日中「両属」であり日本専属ではなかったということだけを強調した<sup>23)</sup>。

王韜によると、琉球を巡る日中の争いについて西洋諸国の輿論にはおよそ二つの論調があり、一つは琉球は日本と「同文同俗」なので日本に帰属すべきだ；もう一つは琉球は日本とロシアの二大国の間にあるので、日本による琉球併合は琉球を守ることになると同時に、ロシア人の野望を絶つこともできるのだ、つまり西洋諸国の輿論の大半は日本の肩を持つものだ、という。そこから見れば、一つ目の論調は重野論に、二つ目の論調は岡千仞論にそれぞれ似ていることが分かる。王韜は、これらはすべて偏った論議であり、土地が瘠せている上に民が貧しい独立国の琉球のために、西洋列強が日中両国と仲違いすることはないと考えている。ここで、王韜は再び琉球を守るための中日連携構想を提起した。即ち、「唇齒輔車の誼」から日本は中国と共同して琉球を守り、琉球を日中両国の海上防衛のための障壁になるようにすべきだと希望している<sup>24)</sup>。

22) 同上、151頁。「即使叢爾彈丸弱小不能自強，亦當相與共保之，俾得守其千餘年自立之國：斯乃所以聯唇齒而固屏藩之義。今反翦滅而傾覆之，挾詐彌縫，囁嚅掩飾，以便其私！將以此欺天下乎？」

23) 王韜「駁日人言取琉球有十証」、『穀園文錄外編』、152-155頁。

24) 王韜「琉事不足辯」、『穀園文錄外編』、155-158頁。「琉球為千餘年來自立之國，雖叢爾彈丸，弱小不能自強，而既託日本之宇下，又入貢於中朝，久為藩服，矢慎矢恭，何不可約中朝相與共保之，以聯唇齒輔車之誼，俾為中日之維屏維翰。」

「西力東漸」の脅威に立ち向かって、王韜は「連日抗露」（日本と連携してロシアに抵抗すること）を唱える。彼は明治日本の興亜主義に共鳴し、外国人会員として興亜会の活動に参加し、興亜主義の「日清連携して西洋に抵抗する」という趣旨にある程度期待していた。だが、琉球が日本に併呑された。王韜から見れば、英仏は中国の南東にある三つの藩属国（ベトナム・暹羅・ビルマ）を占拠してはいるが、それを滅ぼしてはいない。しかし日本は琉球国王を捕まえその土地を併呑し琉球を亡国に至らしめた。そのような日本の行為は、英仏らの西洋列強よりもいっそう甚だしく、国際公法に違反するだけでなく、東アジアの伝統的国際秩序への挑戦にもなるのだ、天下の公論にもとるのだという。そこで王韜は明治政府の琉球侵略を批判し、かつて期待していた興亜会に対して激しい不満を持つようになり始めた<sup>25)</sup>。王韜は、「興亜」の第一義は日本と中国の和解で、日中和解の第一義は琉球に土地を返還することだとして、自ら琉球問題の解決法を提起している。即ちまず日本は中山府を琉球国王に還し、琉球王国を存続させる。こうして中国は初めて日本・イギリスと連携して共にロシアの侵略を防ぐことができるのだという<sup>26)</sup>。

要するに、数百年来中国を中心とする華夷秩序下にあった琉球の地位について、この時期の王韜は中国と琉球の伝統的関係を維持し、琉球の存立を保とうとしたのであろう<sup>27)</sup>。清朝末期の中国では、知識人は万国公法（近代国際法）の持つ重大な意義を認め、中国も国際法に依拠して対外関係を処理するべきだと考えてはいるが、他方で近代西洋のパワーポリティクスの実現を前にして、万国公法の虚偽性を考えなければならなかった<sup>28)</sup>。彼らは「強弱相制する」万国公法に「小国を存立させる」義があると認識している。この「小国を存立させる」義はまさに王韜の「存祀主義」（Ancestral Worship Tenet）と共通している<sup>29)</sup>。王韜は、万国公法は西洋の強権政治の道具に過ぎず、国力に依存するので、恃むべきだが完全に恃めるとは限らないもの<sup>30)</sup>として、日中の中の琉球問題に対して、多くの清朝官僚と同じ態度で琉球王国の存続を目標に

25) 王韜の興亜会に対する批判について、並木頼寿「明治初期の興亜論と曾根俊虎について」（『中国研究月報』544号、1993年）、拙論「清末中国の興亜会に対する態度とその背景」（『九大法学』82号、2001年）などがある。

26) 王韜「論中日當釋嫌」、『循環日報』1880年5月14日。

27) これまでの研究で王韜は「欧州遊歴を通して伝統の華夷観を捨てた」、「近代外交思想の開拓者」とされている（張海林、前掲『王韜評伝』の「第七章近代外交思想的開拓者」）が、中国と琉球の関係に関して王韜は異なった考えを示したことに注目されたい。

28) 田濤『国際法輸入与晚清中国』（济南：済南出版社、2001）、181頁。

29) 同上、256～260頁。晚清知識界の国際法観について、林学忠『從万国公法到公法外交：晚清国際法的伝入、詮釋與応用』（上海：上海古籍出版社、2009）を参照。

30) 王韜「泰西立約不足恃」、『攷園文録外編』巻5、129頁。

し、中国が琉球に対して「存祀主義」を履行するように主張したのである。

## 五 興亜論と琉球問題の矛盾

興亜論を唱えた明治の知識人たちは『普仏戦記』に記された世界情勢に関する王韜の分析に惹かれていた。「興亜」という理想において王韜は中村・重野・岡らの明治知識人と共鳴したのは確かである。興亜論の祖型は幕末期の平井国臣・勝海舟らの思想にすでに現れていたが、琉球処分翌年の1880年に、一部の官僚と民間知識人によって、「日清提携」を中心にしてアジア全体が連帯して西洋に抵抗することを目指す興亜会が成立した。明治期の興亜主義は「弱小国の自覚」という心情的基礎からアジアの同一性を重視し、「同文（漢字）」、「同種」、「同洲」、「同俗」を紐帯としてアジア諸国の連帯を唱えるものであり、危機感を持った数多くの東アジア知識人の共鳴を得ている。中村・重野・岡はみな興亜会の重要メンバーであり、王韜も入会していた。王韜は会の成立当初興亜主義の宣伝に香港に来た会の主幹である曾根俊虎に会った時、独立を失いつつあるアジア諸国の現状を憂慮していることや、興亜会の趣旨・曾根の日中提携を中心とした興亜理念を大いに称賛する意を伝えた<sup>31)</sup>。また「亞洲半属欧人」（アジアは半分欧州人に属す）といった文を通してアジア情勢への憂患意識を表し、岡千仞宛ての書簡では中国と日本の連携を呼びかけた<sup>32)</sup>。さらに「中外合力防俄」（中国と外国、力を合わせてロシアを防ぐ）と題する文において中国・日本・イギリスの三国が連携してロシアの南進に抵抗しようと唱えている。

王韜と中村・重野・岡の四人はみな興亜主義の賛同者であるが、四人の興亜論はそれぞれ特色があり、必ずしも同じ考え方ではなかった。中村は「脱亜」欧化の風潮の中で「漢学不可廢」と唱え、中国・朝鮮蔑視、弱肉強食の「パワーポリティクス」の政治現実を批判する。彼の「興亜」は国際平和主義及び儒教思想の政治観に基づいたものであり、対等・平等を前提にした平和的友好的な興亜論である<sup>33)</sup>。王韜の「興亜」はロシアの拡張を防備することが目的であり、中村の立場とほぼ一致しており、日中の対等的な連携を希望している。岡千仞の「興亜」は侵略的志向を持ったものであり、日本が中国の上に君臨する興亜論である。岡が王韜に『ロシア志』

31) 王韜「法越交兵紀序」（1884）、《澁園文録外編》卷11、312頁。

32) 王韜「與日本岡鹿門」、李天綱編校『澁園文新編』（香港：三聯書店、1998）、300頁。「今日亞洲中、唯中與日可為輔車之相依、唇齒之相庇」

33) 拙論「明治日本の興亜論與漢学：以中村正直為探討中心」、徐興慶編『東亞文化交流與經典詮釋』（台北：台湾大学出版中心、2008）。

の翻訳を勧めた目的は「五大洲を手に取りめる」(將五大洲收於掌握之中) ことにあったのだ<sup>34)</sup>。重野も日清連衡論を提唱している。日清戦争前には確かに日中両国の摩擦を取り除き、両国の連帯関係を強化するために唱えた誠意ある日清連衡であったが、日清戦争後になると次第に日本優越論の傾向が現れていた<sup>35)</sup>。

王韜は1880年8月16日の『循環日報』に「興亜會宜杜其弊論」(興亜会は弊害を除去すべきである) を発表し、興亜主義に賛同する上で明治政府の台湾出兵と琉球処分を批判した後、興亜会は「保邦陸隣の道」と「興滅繼絶の仁」に則った言行をすべしと提言し、中国通として政府に利用されないことがないようにと興亜会関係者に注意をした。ちなみに王韜は琉球問題などについての見解を興亜会に求めていたが、興亜会側はそれに答えなかったのである。

日本遊歴の間、東京で岡千仞と王韜は合わせて28回も会っていた。二人は親密に付き合い、よく「天下の大計を放談」したため、1880年代の王韜は岡を、常に日中英三国が連携してロシアに抵抗しようとする真摯な日中連携論者だと思っていた<sup>36)</sup> ようで、自分の中日連携の呼びかけに岡が応えてくれることを期待していた。他方、岡千仞は日本の琉球併合に対する王韜の批判的態度を知っていたはずだが、琉球問題を巡る日中間の政治対立については、自分の明治政府擁護の立場、即ち琉球の日本帰属という考えを王韜に打ち明けずに、矛盾回避の対応策を取ったのである。岡千仞は中国を遊歴したときに、たくさんの中国知識人に会っており、無論琉球問題について尋ねられている。その際、あまり親密でない人に対して、岡は「士は各々の国の為」(士各為其国) との口実で一笑に付すか、或いは、自分が一介の「下人」に過ぎないため琉球の件の顛末について詳しく調べていないとお茶を濁している<sup>37)</sup>。しかし、親しく付き合った張経甫らの上海士人たちが明治政府の琉球処分を非難したときに、岡千仞は琉球問題に対する自分の本音をこう述べた。

中土一旦以我邦縣琉球之故，大舉問罪，則我邦雖弱小，獨立東海二千年，勢不得不一戰。一戰而敗則再戰，再戰而敗則三戰，不以千敗百挫，少屈其銳鋒，決雌雄於百戰之後，如英法百年之役。(中略) 此可以雪東洋積年之辱也。僕林下人，不知鼎琉球之何故，唯一目東洋威武震歐土，則足矣。<sup>38)</sup>

34) 徐興慶、前掲「王韜與日本維新人物之思想比較」、164頁。

35) 陶徳民『明治の漢学者と中国：安繹・天囚・湖南の外交論策』（関西大学出版部、2007）を参照。

36) 王韜「跋岡鹿門送西吉甫游俄文後」、『澠園文新編』145頁。「鹿門之志，常欲中、日相睦，聯英以拒俄」

37) 岡千仞『觀光紀游』巻6「燕京日記卷下」、6-7頁。「僕林下人，未審此事顛末」

38) 『觀光紀游』巻4「滬上日記」、1-2頁。

要するに、琉球処分理由は分からないが、もし中国が琉球処分の罪で日本を非難するなら、日本は英仏の「百年の役」のように勝負を決めるまで中国と戦い続け、東洋の武威をもってヨーロッパを震撼させるのだと宣言している。主戦論者の岡は、秀吉の朝鮮出兵が「国威を海外に誇示した」としてかつての朝鮮侵略を称賛し、琉球のためなら日本は中国との戦いも惜しまないという態度を明白に表している<sup>39)</sup>。それと同時に岡はまた、琉球問題が日中間の「微事」にすぎないと言い、琉球の争いを問わずに中国と日本は連携してロシアに抵抗することを期待しているのだ。彼は、日中両国は連携しないと西洋に抵抗することができない、琉球・朝鮮問題で中国と日本が互いに相容れなければ、両国とも自立できなくなり、「東洋の不利」になると考えているのである<sup>40)</sup>。

国際関係について、中村正直は「国の強弱は、人民智徳の多少に在り、版図の大小にあらず」として、国家間の付き合いも人間の交際と同じように孔子の「仁愛」・「忠恕」・「忠信篤敬」といった道徳や倫理思想に従わなくては行けないと考え<sup>41)</sup>、孟子の「仁政」・「王道」・徳治主義及び民本思想を国家間の関係や現実の外交活動においても実践すべきだと唱えている。中村の興亜論と王韜のそれを比べると、形式も心情も類似しており、どちらも儒教的文化思想に基づいたものである。そのため、琉球に対して、二人とも琉球独立の護持を主張し、相当近い態度を示している。

重野安繹の国際関係認識はより現実的なものであった。彼は「万国史記序」と題する文において、中国伝統の中華思想的国際観念を批判し、「中土」と自称し万国を「海国」と見なす魏源の『海国図志』に見られた華夷意識の局限性を指摘した。重野からこの文へのコメントを求められた王韜はこの文を「論高識卓で、宇宙間に有数の文字だ」と高く評価して尊敬の意を表している<sup>42)</sup>。重野から見れば、「冊封」や「朝貢」をする宗藩関係は「虚名」だけであり、「実利」を伴わない。国際関係についていえば、重野は「虚名」より「実利」をより重視するのだ。1870年代初め、重野は岡本監輔の『窮北日記』のために書いた跋文において、中国・日本・ロシアの琉球・北海道を巡る領土紛争について、次のようにその利害関係を論じている。

南、北倭之称、見於《隋書》。源君美以琉球為南倭、蝦地為北倭、以為皆我種類也。予固謂琉球之有支那、猶蝦地之有俄羅斯。支那以虚名争琉球、我陽與之名而陰收其利；冊封進貢、

39) 岡千仞「論豊臣氏征朝鮮」、『藏名山房文初集』巻4、29頁。

40) 岡千仞『觀光紀游』巻8「粵南日記卷上」、1頁。

41) 中村正直「内地誌略序」、『敬宇文集』巻5、21頁。

42) 『成齋文初集』巻1、27-28頁、重野安繹の〈万国史記序〉の後に附した王韜のコメント。

不過順適其意。俄羅斯以利爭蝦地，我徒擁虛名而彼日收其實利；（中略）雖然，窮髮不毛，亦我版図也；連眉黥面，亦我種類也。一時為俄羅斯所逼，而內嚮之志未嘗忘焉。蓋我之策，每得於南而失乎北也！岡本監輔於窮北之地，志在開拓。夫北之難開，不若南之易治。俄羅斯方圖遠略，固與支那不同；假令我措置得宜，猶不能保其無侵略，況於策屢失哉！<sup>43)</sup>

琉球と北海道はどちらも日本の版図に帰属し、日本人と同族だとする重野は、琉球を巡って中国が虚名を争うのに対して日本は陰で実利を収めていると認識し、ロシアが強すぎるため、日本は版図を広げる際、「開き難い」北海道より琉球のほうが「治まりやすい」と判断している。日本は琉球問題で中国と、北海道問題でロシアとそれぞれ緊張状態にある中で、重野のこの議論は明治政府のために当時の日本周辺の国際情勢分析を提供しているようで、当局が岡本監輔論を参照して琉球問題・北海道問題を処理するようにと、重野は望んでいるのであろう。

王韜の『循環日報』は琉球処分後、「論日本未嘗無人」と題する論説において重野論を紹介し、その建言が近代国家建設に果たした役割及びその鋭い洞察力を絶賛している。そして重野の見地を高く評価すると同時に、琉球問題の処理における清政府の反応の鈍さや対応策のミスを批判した。

## 六 おわりに

1870-1880年代は、中国が周辺朝貢国を次々と喪失することによって東アジアの伝統的秩序が崩壊し、東アジアの国際関係が大きく変貌していく時期であったが、その時期における琉球問題はまさに日中関係の原点の一つである。1879年、明治政府による「廢琉置県」で日中関係が緊張する中、王韜は日本の民間知識人に招かれて訪日し、日中文化交流史上に美談を残した。しかし、友好交流や興亜主義における共鳴の裏側には、日中両国の知識人が世界情勢、特に東アジアの国際関係認識においてナショナリズムの対立や国際観念の齟齬といった様相を呈していた。

特に琉球の帰属という現実的な政治問題を巡り、王韜訪日時に彼と深く交わった中村正直・重野安繹、岡千仞はそれぞれ異なった態度を示している。中村は明治政府の琉球処分政策に反対し、東アジア伝統の「徳治」・「仁政」を主張して武力による小国併呑・近代西洋のパワーポ

43) 重野安繹「窮北日誌跋」、岡本監輔『窮北日誌』（京都：北門社、1871）下巻に所収。ちなみに、1880年2月5日の『申報』は、『循環日報』からこの重野論を紹介した王韜の「論日本未嘗無人」と題する論説を転載している（第四頁）。この引用は「論日本未嘗無人」によるもの。句読点は筆者。

リテクスを強く批判する。それに対して重野は言語・種族という文化的視点から、琉球と日本本土との言語文化的・民族的なつながりや同一性を考証することによって琉球の日本帰属を唱える。重野の考えは「日琉同源説」に類似するものであり、琉球に文化的同一性を提示すると同時に、明治政府に琉球兼併のための理論的根拠と学術的サポートを提供することにもなったのである。岡は現実的な国際政治の立場から、琉球の「両属」状態を改め、日琉関係を近代的に再編し、琉球の日本帰属が国際公法に承認されねばならないと明言している。王韜は琉球「両属」の実態を認めるが、琉球を兼併し、中琉関係を引き裂こうとする日本を強く非難した。これまでの中琉日の関係を保ち、琉球を独立国として存続させ、琉球を守るための中日連携論を提起し、日中両国が共同してアジアの安全保障に当たることを期待している。

要するに、王韜と中村の両者は琉球と日中両国の伝統的関係の継続を主張している。「存亡継絶」（亡びた国を存続させ、絶えた世を継がせる）という王道思想に基づいた王韜と中村の考えには共通点があると言える。興亜の理想において王韜・中村・重野・岡の四人全員が興亜理念に賛成するという点では一致するが、現実的な国益にかかわると、岡と重野の見解には明らかに近代日本国家形成におけるナショナリズムらしきものや近代国家の領土観念が見られる。上述の分析から、王韜と三人の日本の友人のそれぞれの琉球認識、及び東アジアが伝統から近代へと変容する過程における中琉日関係の構築に対する異なった思索が見られるのである。

岡と重野が琉球問題において鮮明なナショナリズム的認識と近代西洋の領土概念への理解を示したことから、明治初期の日本の知識人は王韜をはじめとする同時期の中国の知識人に比べるといち早く積極的に西洋の近代国家理念、主権・領土観念を受容し、琉球問題ないし東アジアの国際関係問題を巡ってその認識と対応の仕方が一段と近代性を有していたと言えよう。中国の知識人は対外関係において儒教の「存祀主義」の理想を温存しながら中国と周辺地域との間の伝統的関係を護持しようとしている。それに対して、一部の日本の知識人はいち早く東アジアの知識人が持つ伝統的国際観念から抜け出し、強い危機意識と国際法観念に基づいて、ナショナリズムの立場から国際公法を積極的且つ現実的に利用して、タイムリーに日琉関係の近代的改編を推し進めたのである。

このように、近代東アジアの国際関係が再編される際、日中の知識人は中琉日関係について異なるバージョンを提示したのである。ただし、近代以降の世界は争いや戦いに満ち、弱小民族が征服される運命から如何にして免れることができるかは、全世界の人類が一緒に考えなくてはならない一大問題であろう。